

ML授業におけるレッスン・カリキュラムの見直しとその効果

小倉 隆一郎*

The Effect of Revision in the ML Class lesson curriculum

Ryuichiro OGURA

要旨 本学の教員養成課程のML授業において、ピアノの学習経験が少ない学生への対応は検討を要する重要な課題である。2009年度にML授業を受講する学生が自ら学ぶ意欲を喚起することを目的として、授業カリキュラムの見直しを行った。見直しの要点は、1つ目に練習課題の提示方法を見直すこと、2つ目にテキストの進め方の指針を明示することである。その結果、学年始めの進度がバイエル前半と回答したグループで授業カリキュラムの見直しの効果が顕著であった。一方、ピアノの経験が無いグループではほとんどその効果は認められなかった。主な理由として、ピアノの学習経験がある学生は練習の仕方が身につけており、練習課題を提示すれば自ら学習する意欲をもてることが考えられる。

キーワード：ミュージックラボラトリー ML ピアノ 幼児教育 バイエル

1. 研究課題

本学ではミュージックラボラトリー（以下MLと略）は、主としてピアノの演奏技能を養成する目的で使用している。大学入学以前の音楽経験が少ない学生について、ピアノの進度が遅れる傾向がみられた。従来、個人または少人数のグループで行われてきたピアノの指導を、多人数のML授業で実施する場合、音楽経験が少ない学生への対応は避けられない。そこで論者は2006年度から模範演奏をフロッピーディスク他のメディアを通して提供すること（小倉 2006）、および読譜練習をくり返すこと（小倉 2007）を試行している。多人数のML授業の場合、学生が自ら学ぶ意欲を喚起することが不可欠である。カリキュラムを見直すことによって、学生が履修する範囲の全体像を把握し、自発的に練習することを期待したい。

今回、テキストの進め方と指示の方法・タイミングについてカリキュラムの検討と見直しを行っ

た。本学では、ピアノの基礎技能育成のテキストとして「大学ピアノ教本」（教育芸術社）を使用している。「大学ピアノ教本」は「バイエルピアノ教則本」（以降、バイエルと略）からの抜粋曲を主とし、これに関連した補充曲と、教員養成校の学生に適した楽典の知識を加えた内容である。従って、今回のカリキュラムの見直しに際し、「バイエル」の使い方・進め方に関する先行研究の調査を行った。カリキュラムの改訂は2008年秋から準備を始め、実際の授業には2009年の新学期に採用している。

4月～7月半期の授業が終了した時点で、受講生の進捗状況調査を行った。このデータを昨年と同様の調査結果と比較することにより、カリキュラム改訂の効果を検証したい。

2. ML授業の概要とテキスト

教育学部は学校教育課程と心理教育課程に分かれ、それぞれ取得できる免許・資格は異なる。今回、研究対象としたML授業の位置づけ、とりわけ学生が当該授業を受講する目的を明らかにした上

*おぐら りゅういちろう 文教大学教育学部心理教育課程

で、テキストの進め方を検討する。

2-1. ML授業の位置づけ

教育学部・学校教育課程で取得できる教員免許は中学校・高等学校の各専修と小学校、心理教育課程は保育士資格と幼稚園および小学校である。

表1 各課程・コースで取得可能な免許・資格

免許・資格	学校教育 課程	心理教育課程	
		児童コース	幼児コース
保育士			○
幼稚園	△	○	○
小学校	○	○	△
中学校	○		
高等学校	○		

△は選抜試験によって一部取得可能

心理教育課程の音楽関連科目は表2に示す通り、2年次で2科目、3年次で3科目開講される。ML教室における授業は「音楽Ⅰ・音楽Ⅱ」と「器楽表現基礎Ⅰ・Ⅱ」および「器楽伴奏法Ⅰ・Ⅱ」であり、「音楽Ⅰ・音楽Ⅱ」以外は選択科目である。

表2 心理教育課程の音楽関連科目

	科目名	
2年次	・音楽Ⅰ・音楽Ⅱ (ML)	音楽Ⅰ・Ⅱ 合せて半 期1コマ
	・器楽表現基礎Ⅰ・ Ⅱ (ML)	Ⅰが春学期、Ⅱが秋学 期それぞれ1コマ
3年次	・器楽伴奏法Ⅰ・Ⅱ (ML)	同上
	・歌唱表現基礎	半期1コマ
	・パフォーマンスA (音楽表現指導法)	同上

今回、研究対象としたML授業は心理教育課程の児童コースおよび幼児コースの2年次必修科目「音楽Ⅰ・音楽Ⅱ」である。受講者は両コース合せて114名であり、将来、保育士・小学校教員・幼稚園教諭をめざす学生である。従って、この授業の目的は保育所・小学校・幼稚園の現場で音楽活動を行うためのピアノ技術を習得すること、および余裕のある学生には弾き歌いの技能を身につけるこ

とである。そして採用試験の実技課題に対応することも視野に入れなければならない。本学と同様の養成校における音楽の初期教育で、その内容をピアノ技術と弾き歌いに設定することは全国的な傾向と合致する。一例をあげれば、保育士および幼稚園教諭養成校430校を対象としたアンケート調査によると、器楽指導において重要視している内容はピアノ演奏と弾き歌いが共に85.7%の回答があり、群を抜いている、とのことである(新海2008)。

2-2. テキストの特徴

「音楽Ⅰ・音楽Ⅱ」のテキスト「大学ピアノ教本」は保育士・小学校教員・幼稚園教諭にかかわる音楽の基礎技能を修得する目的および観点から選定した。内容を概観すると、本教材94曲、補充教材13曲の計107曲、本教材はバイエル61曲、ツェルニー33曲が難易度順に並んでいる。補充教材にはマーチが8曲、J.S.Bachのメヌエットが2曲、Burgmüller, Schumann, Beethovenの小品がそれぞれ1曲含まれている。

本教材のバイエル61曲中、34曲は教員養成の目的に応じて編曲ないし移調してある。学習曲の調性配列を工夫して編曲した一例をあげる。本学で使用している「子どもの歌名曲アルバム」(ドレミ楽譜出版社)に掲載される220曲の調性を調べたところ、もっとも多い調性はヘ長調であった。しかしバイエル106曲中、ヘ長調は92番になるまで出てこない。「大学ピアノ教本」ではヘ長調の課題を早期に学習させる目的で、元はハ長調のバイエル12番(譜例1)をヘ長調に移調、さらに左手部分をヘ音譜表に変更してFとCのコードを付して27番(譜例2)に掲載している。

譜例1 バイエル12番



譜例2 「大学ピアノ教本」27番



バイエルの全曲中、半数を過ぎないとヘ音譜表の課題が出てこないという問題点は、教則本としてのバイエル批判の要因になっている。千蔵はバイエルに対する賛否両論に触れ、反対派の意見として「ヘ音譜表が第54曲でやっと出てくるというような、導入教材が幼稚すぎる扱いになっているといったことにたいする不満を表明している」(千蔵,1989)と述べている。

テキスト「大学ピアノ教本」の特徴およびバイエルとの相違点をまとめると

- (1) 教員養成の目的に即してヘ長調・ト長調の課題を早い時期に配置している。
- (2) ヘ音譜表は始めから導入されている。
- (3) 基礎的なコードネームの知識と奏法が身に付くように配慮されている。
- (4) 右手の音高は上一点ハを1指とするポジションから始まる。

3. 授業カリキュラムと指導方法の改善

2009年度始めにピアノ練習課題の学生への提示方法を改善した。その理由の1つには、学生が自ら学ぶ意欲をもつために使いやすく実情に沿ったカリキュラムを検討していたこと。2つ目は、2007および2008年度に大学全体で実施した授業アンケートに次のような記述があり、その内容が今回のカリキュラム検討と大いに関連があったことである。以下、授業アンケートより抜粋する。

2007年度「音楽の授業は2年生からですが、1年生の時に授業で使う楽譜がほしかった」「家にピアノが無いのですが、大学内外で練習できる場所がありますか」

2008年度「ピアノは初心者ですが、授業回数に比べて曲数が多く、やってもやっても終わらない感じがする」「大学の楽譜が終わった後、どのよう

に練習したらよいかははっきり分からない」

アンケートの記述欄には他にも同様の意見・要望が書かれていた。これらをまとめると、

- (1) テキストの練習曲の進め方について、そのルールが不明確である。
- (2) 初心者が1年間(必修は半年間)に学習する曲数としては多すぎる。
- (3) ML授業は2年次であるが1年次から準備・予習の指示が必要である。

2008年度、論者が担当したML授業の反省点の一つとして、課題の練習に対する意欲が薄い学生が存在する。とりわけ初心者とその傾向が強いことがあげられる。上述のアンケートの意見は、進度の遅れがちな学生の意欲を喚起できない理由の一部分を成しているのではないだろうか。

上のアンケートの意見と授業における論者の反省点を参考に、以下の3点についてテキスト「大学ピアノ教本」の学習の指針を学生に提示した。

1. テキスト本教材94曲を以下の5グレードに設定し、入学前のピアノの学習経験によって学生個々に適した段階から練習を始められるようにした。練習を開始する段階は、始めは学生に選択させ、後の授業で論者が適しているかどうか判断し、必要があれば変更する。

①ピアノをこれから始める人

「大学ピアノ教本」No.1～20

②バイエル31番程度の人

「大学ピアノ教本」No.21～38

③バイエル61番程度の人

「大学ピアノ教本」No.39～54

④バイエル85番程度の人

「大学ピアノ教本」No.55～66

⑤バイエル終了程度の人

「大学ピアノ教本」No.67～94

2. 1年次に上の学習の指針を学生に提示してML授業が始まる2年次までに準備する。

3. No.1～66 は適宜、曲をチョイスしてよいこととし、No.67～94 No.97～101 はバイエル終了以上の学生も全曲学習する。

4. 授業カリキュラム見直しの効果

4-1. ピアノ学習経験に関するアンケート

ML授業の受講者についてピアノの学習経験を把握する目的で記名式によるアンケートを実施した。カリキュラム改訂の効果とピアノの学習経験のかかわりを明らかにするために必要なデータである。2008年および2009年の結果を掲載する。

[アンケートの時期と対象]

2008年度・2009年度共通

4月「音楽Ⅰ・Ⅱ」授業の初日

教育学部心理教育課程の2年次生

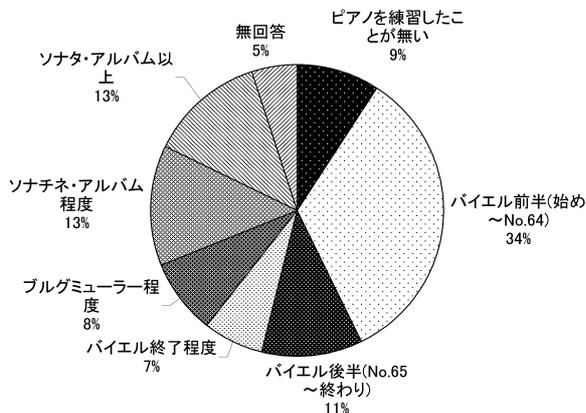
[アンケートの結果]

2008年度のピアノ学習経験の結果を表3, それらの割合をグラフ1に示す。

表3 ピアノ学習経験 2008年度

ピアノ学習経験 (2008)	人数
ピアノを練習したことが無い	11
バイエル前半 (始め～No.64)	40
バイエル後半 (No.65～終わり)	13
バイエル終了程度	8
ブルグミュラー程度	10
ソナチネ・アルバム程度	16
ソナタ・アルバム以上	15
無回答	6
総合計	119

グラフ1 ピアノ学習経験 2008年度の割合

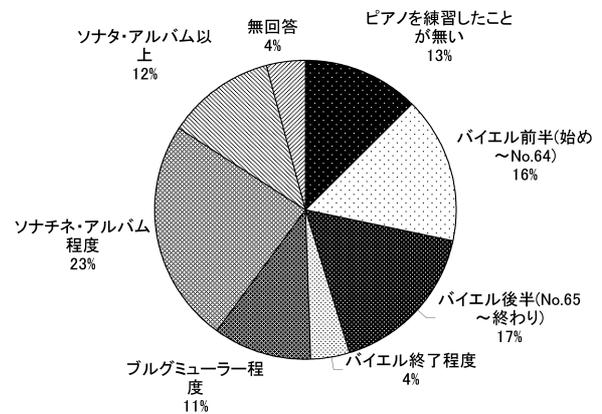


の割合をグラフ2に示す。

表4 ピアノ学習経験 2009年度

ピアノ学習経験 (2009)	人数
ピアノを練習したことが無い	12
バイエル前半 (始め～No.64)	15
バイエル後半 (No.65～終わり)	16
バイエル終了程度	4
ブルグミュラー程度	10
ソナチネ・アルバム程度	23
ソナタ・アルバム以上	11
無回答	4
総合計	95

グラフ2 ピアノ学習経験 2009年度の割合



2008年度と2009年度を比較すると、2009年度の学生の方がピアノの学習経験が豊富であることが分かる。初心者の範囲、すなわち「ピアノを練習したことが無い」と「バイエル前半(始め～No.64)」を合わせると2008年度では43%に対し2009年度は29%である。

「ピアノを練習したことがある」と答えた学生の内訳は以下の通りである。

表5 2008年度ピアノ練習経験のある人の内訳

現在、練習している 41名中		
ピアノの先生についている 9名		
独習している 31名		
未回答 1名		
過去に習ったことが有る (今は止めている) 64名中		
学習期間	人数	
1年	6	
2年	5	
3年	9	
4年	2	
5年	3	
6年	5	
7年	4	
8年	6	
9年	7	
10年	6	
11年	0	
12年	4	
13年	2	
14年	3	
15年	1	
未回答	1	

表6 2009年度ピアノ練習経験のある人の内訳

現在、練習している 22名中		
ピアノの先生についている 11名		
独習している 11名		
過去に習ったことが有る (今は止めている) 61名中		
学習期間	人数	
1年	4	
2年	5	
3年	4	
4年	2	
5年	5	
6年	2	
7年	2	
8年	10	
9年	4	
10年	6	
11年	11	
12年	1	
13年	2	
14年	2	
未回答	1	

「現在、練習している」学生の中で「独習している」人の割合は2008年度が31名76%であるのに対し2009年度は11名50%であった。また、「過去に習ったことが有る」と回答した学生の学習期間をまとめると以下の通りである。

表7 学習期間の年度比較

学習期間	2008年度	2009年度
1～5年	25名 (39%)	20名 (33%)
6～10	28名 (44%)	24名 (39%)
11年以上	11名 (17%)	17名 (28%)

学習経験が1～5年と少ない学生は2008年度が39%に対し2009年度は33%である。逆に11年以上の経験をもつ学生は2008年度17%に対し2009年度は28%である。当然のことながら、入学前のピアノの進捗と学習経験の期間は相関がみられる。

4-2. カリキュラム見直し効果の検証

本論ではカリキュラムの見直しを、主としてピアノ学習経験が無いかバイエルを学習している学生を対象とした。4-1のアンケートにおいて「ピアノを練習したことが無い」または「バイエル前半(始め～No.64)」「バイエル後半(No.65～終わり)」と回答した学生について、4月から7月までの春学期を終了時、期末試験の際の進捗状況を2008年と2009年のデータで比較した。

表8 学期末進捗の平均

学年始めのグレード	春学期末の進捗	
	2008年	2009年
ピアノ練習経験なし	62.6	62.8
バイエル前半	71.0	76.7
バイエル後半	95.5	96.4
3グレードの平均	74.6	80.2

表8の数字はグレード毎に、学生が学期末に到達した進捗、すなわちテキストの曲番号を調査し、その平均を少数第一位で四捨五入したものである。平均計算の元となる全学生のデータを付録2に掲載する。これらのデータを両年度で比較した結果、

3つのグレードの平均では2008年度が74.6に対し2009年度が80.2となり、見直しの効果が認められる。とりわけ学年始めの進度がバイエル前半のグループが到達進度の差で5.7であり、その効果が顕著であった。一方、ピアノの経験が無いグループではその効果はほとんど認められず、バイエル後半のグループではわずかに伸張がみられた。バイエル前半のグループで見直しの効果が顕著であった原因は次の2点が考えられる。1点目は、授業の開始以前に、わずかでもピアノの学習経験がある学生は練習の仕方が身につけており、練習課題を提示すれば自ら学習する意欲をもつことができること。2点目は、テキストの前半66番までは2曲を除いて、左手のポジションが移動しないため、比較的簡易で進めやすい課題であることが推察される。逆にピアノの学習経験の無いグループで進度が伸びない理由としては、授業における指導のみでは練習の方法や習慣が充分には身につけなかったことが考えられる。また、始めの進度がバイエル後半であった学生のグループが予想外に伸びなかった理由は、72番・76番・81番・89番～94番など難しい曲が壁となり、習得に時間を要したことが想像できる。これは授業を通して気付いたことであるが、難しいポイントを克服する指導方法や課題の提示の仕方に問題が隠されているのかもわからない。

5. あとがき

論者はML授業において、ピアノの学習経験が少ない学生への対応を重要な課題と捉え、改善の工夫を試行している。その一環として、2009年度にML授業を受講する学生に対して授業カリキュラムの見直しを行った。見直しの要点は、1つ目に練習課題の提示方法を見直すこと、2つ目にテキストの進め方の指針を明示することである。

ML授業で採用しているテキスト「大学ピアノ教本」は、その6割がバイエル、3割がツェルニーからの抜粋曲であり、教員養成の目的に即して編集

されている。学生は曲番号に従って順に学習していけば無理なく所定の演奏力が身につくはずであるが、授業開始後すぐに進度で大きな個人差が表れる。ピアノのレッスンではこのような個人差に即対応できるが、ML授業では学生一人に十分な時間をかけた指導は難しい。そこで、テキストを5つのグレードに分けて進め方の指針を示し、授業開始6ヶ月前には自学自習を始められるように指導・伝達の機会をつくった。また66番以下の課題は適宜選んで学習してもよいこととし、進度が遅れることによる学習意欲の喪失を防ぐ目的で工夫した。

その結果、学年始めの進度がバイエル前半と回答したグループで授業カリキュラムの見直しの効果が顕著であった。今後はピアノの学習経験の無いグループで進度が伸びない原因を精査し、改善への検討を進めたい。

引用文献

- 千歳八郎 1989『ピアノ学習ハンドブック』, 春秋社 p.16
 新海 節 2008 「保育士及び幼稚園教諭養成校のピアノ指導における一私見」 帝京学園短期大学:研究紀要 15 p.2

参考文献

- 小倉隆一郎 2006 「音楽授業におけるMIDI演奏データの活用—ネットワークとフロッピーディスクを利用する—」 文教大学教育学部紀要第40集 pp.43-53
 小倉隆一郎 2007 「Music Laboratoryを用いた初心者へのピアノ指導—読譜力の向上に着目して—」 文教大学教育学部紀要第41集 pp.73-81

楽譜の出典

譜例1

『標準バイエル・ピアノ教則本』全音楽譜出版社
 1983 p.22

譜例2

大学音楽教育研究グループ編 石桁真礼生校閲 1977
 『大学ピアノ教本』教育芸術社 p.30

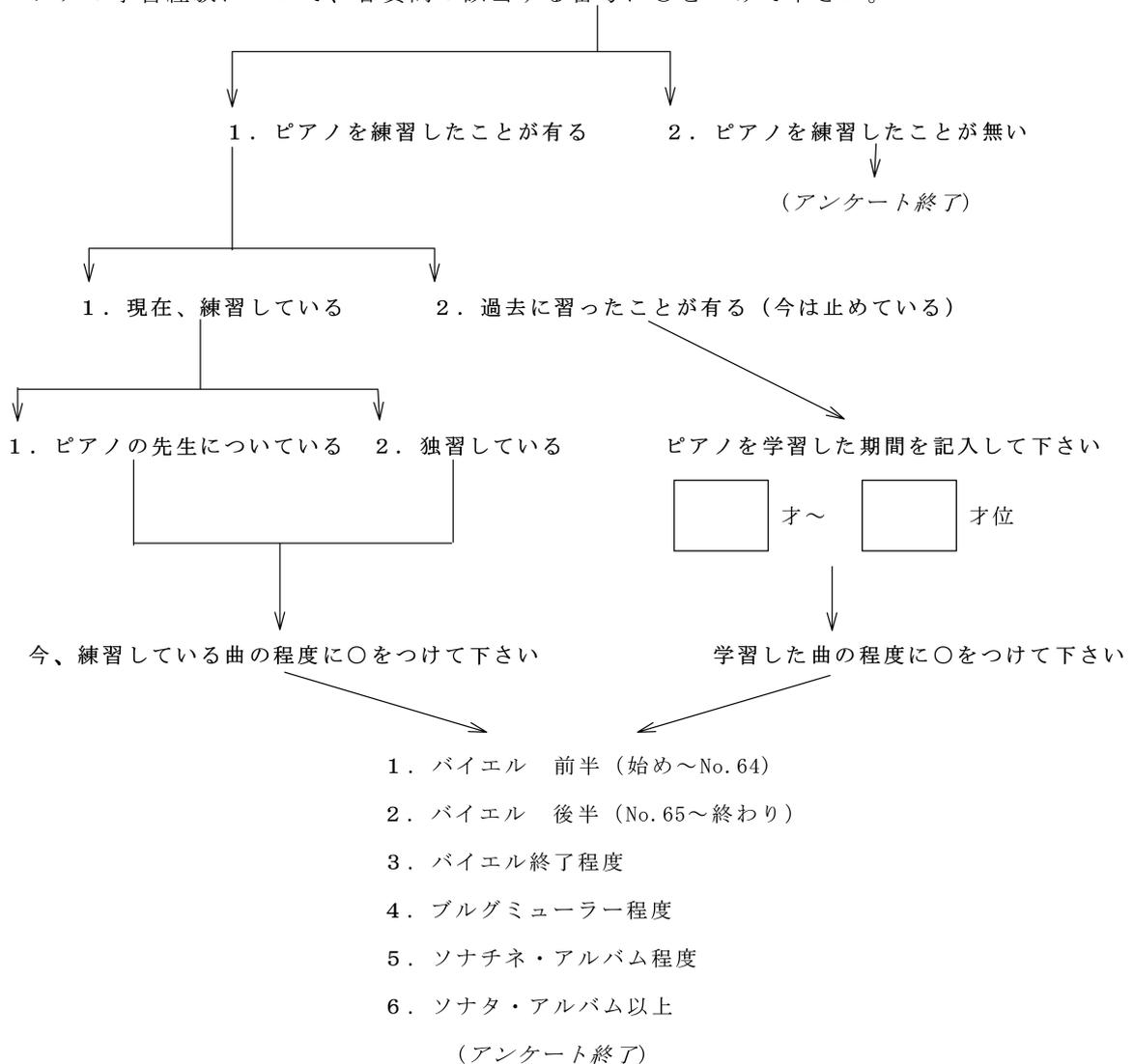
※譜例1・2共、上の資料を論者がFinale2006で浄書した。

付録1 ピアノの学習経験を調査するためのアンケート用紙

音楽・ピアノについてのアンケート

教育学部 心理教育課程	年	コース	番	ふりがな	
				氏名	

ピアノの学習経験について、各質問の該当する番号に○をつけて下さい。



付録2 学期末ピアノ進捗調査の結果

付録2-1 2009年度調査結果

学生 No	学年始めのグレード	春期末進捗
901	0	94
902	0	40
903	0	56
904	0	98
905	0	103
906	0	37
907	0	40
908	0	105
909	0	80
910	0	32
911	0	39
912	0	30
913	1	66
914	1	82
915	1	49
916	1	92
917	1	79
918	1	70
919	1	72
920	1	43
921	1	69
922	1	50
923	1	101
924	1	76
925	1	101
926	1	98
927	1	102
928	2	82
929	2	95
930	2	103
931	2	100
932	2	89
933	2	89
934	2	101

935	2	96
936	2	106
937	2	81
938	2	94
939	2	101
940	2	98
941	2	102
942	2	103
943	2	103

※学年始めのグレード

0 ピアノ練習経験なし

1 バイエル前半

2 バイエル後半

春期末進捗の数字は「大学ピアノ教本」の曲番号を示す。
学生は個人名の代わりに番号で表示した。

ML授業におけるレッスン・カリキュラムの見直しとその効果

付録 2 - 2 2008年度調査結果

学生 No	学年始めのグレード	春期末進度
801	0	48
802	0	81
803	0	75
804	0	77
805	0	51
806	0	55
807	0	45
808	0	48
809	0	89
810	0	66
811	0	54
812	1	74
813	1	67
814	1	68
815	1	70
816	1	91
817	1	81
818	1	53
819	1	56
820	1	34
821	1	66
822	1	65
823	1	80
824	1	48
825	1	69
826	1	106
827	1	89
828	1	84
829	1	65
830	1	78
831	1	80
832	1	77
833	1	79
834	1	35
835	1	44

836	1	85
837	1	51
838	1	89
839	1	53
840	1	75
841	1	65
842	1	77
843	1	72
844	1	75
845	1	62
846	1	74
847	1	83
848	1	102
849	1	90
850	1	75
851	1	53
852	2	94
853	2	78
854	2	89
855	2	101
856	2	104
857	2	99
858	2	105
859	2	101
860	2	90
861	2	87
862	2	85
863	2	102
864	2	107

※学年始めのグレード

0 ピアノ練習経験なし

1 バイエル前半

2 バイエル後半

春期末進度の数字は「大学ピアノ教本」の曲番号を示す。
学生は個人名の代わりに番号で表示した。